



TITLE:

後漢末の清流について

AUTHOR(S):

東, 晉次

CITATION:

東, 晉次. 後漢末の清流について. 東洋史研究 1973, 32(1): 28-52

ISSUE DATE:

1973-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153504>

RIGHT:

後漢末の清流について

東 晉 次

はじめに

一 清流の出自と構造

二 儒家理念

三 察舉體制

四 逸民の人士の清流批判

五 黨錮後の動向——結語に代えて——

はじめに

後漢末、桓靈の間に生起したいわゆる黨錮は、引き續いて起こった黃巾の亂とともに、後漢から魏晉への移行期を取り扱う上にきわめて重要な事件である。従來、この事件に言及した論考は頗る多いが、六朝史への展望の下に、その歴史の意味を追求したものはそれほど多くない。川勝義雄氏の「シナ中世貴族政治の成立について」(『史林』三十三卷四號)、「漢末のレジスタンス運動」(『東洋史研究』二十五卷四號)の二論文^①は、その中でも最も深い理解を示している。氏は、その第一論文において、後漢末に成立した士大夫のサークル——清流が六朝貴族の源流となったことを指摘し、後漢から六朝への歴史的展開をこの事件を媒介にして追求しようとしたのである。

この見解は、學說史的に言えば、清流豪族と濁流豪族の對立をこの事件の本質とする楊聯陞氏の説^⑨に對して批判を加えた宇都宮清吉氏の見解^⑩にその起源をもつ。すなわち、宇都宮氏は、宦官を豪族とするの非を説きつつ、同時に清流派を豪族の一語でくくって、それが政權獲得のために争ったという楊氏の解釋を斥けている。そして、清流とは、當時の知識階級のことであって、經濟的用語であるところの豪族と混同してはならないとし、それら清流派が鬭争したのは、政權獲得のためではなくて、實に、漢代社會の本質（漢代社會の秩序原理たる政治力・その政治力の中心たる皇帝・その皇帝に對する尊信忠誠）のためである。清流派の基盤は豪族階級にあるのではなくて、清議そのものであり、いいかえれば、普遍的な輿論そのものにあるのだという。要するに、宇都宮氏は、黨錮事件の本質を漢帝國の秩序を支える儒教イデオロギーと、漢帝國の秩序を亂す濁流勢力との對決に見出すのである。

川勝氏は、この宇都宮氏の見解を承けて、前述した第一論文を發表した。それに對して、増淵龍夫氏から批判が提出されている^⑪。増淵氏は、川勝氏の知識階級の理念的解釋の行過ぎを警告して次のように言う。當時の知識階級の中には、濁流勢力に對してはもちろん清流派に對しても、暗黙の批判を行なっている一群の人士が存在する。そのような人士は、當時の清流派に内包された儒教的價值基準の名目化・外在化と自己撞着（本來、清流派の論理からいつて批判されるべき外戚を、自分たちの番附の筆頭に擧げて稱讃していること）に對する厳しい批判を行なったのである。それならば、そのような人士（増淵氏は、逸民的風格をもった人士と呼ぶ）を支える社會的基盤はどこにあったのかを、名教的天下の秩序と現實の國家社會との乖離を通して追求すべきであると。

この増淵氏の批判は、事實の面からも、又清流の自己撞着の指摘などの點においても、川勝氏の盲點を衝くものであった。この増淵氏の批判を踏まえて、再度この事件のより深い分析を試みたのが川勝氏の第二論文である。それによると、氏はまず逸民的人士も清流勢力から切り離せない存在であることを確認し、彼らが抵抗に走るゆえんを當時の郷邑社會の實態から理解しようとした。その抵抗を生み出す社會的條件とは、「郷邑の支配をめぐる複數豪族のはげしい競合狀況で

あり、端的に言つて、豪族の領主化傾向による小農民の没落と階層分化の進行であり、古い郷邑秩序の分裂・崩壊の危機的狀況である。有徳なる賢者を登用せよ、その登用法たる郷舉里選を遵守せよ、という清議の徒の主張は、古い郷邑秩序の急速な崩壊狀況を背景にして、その中から生まれてくる秩序再建の要求にはかならない」とし、その對立は、「複數豪族による郷邑秩序の分裂と、豪族群自身の性格的分裂と、郷邑秩序の破壊による豪族對小農民の階級鬭争と、この三者がいりまじった複合的對立」であるとする。「豪族群自身の性格的分裂」とは、豪族が本來持っている自己擴大的性格と、それをチェックする儒家イデオロギーを體現した知識人的性格との矛盾・分裂をさす。この對立の果てには、知識階級の挫折があり、濁流豪族と結んだ宦官政府の領主化路線が前面に進出する。そこから生み出された流民・貧農と富殖豪族層の對立が主要な對立關係として出現し、それが黃巾の大亂へと續いてゆくのである。その後、黃巾の亂によって無秩序狀態に陥った郷邑では、大姓と知識人との協同行なわれ、知識人が郷邑と權力體とのパイプの役割を荷う。そして、「權力媒介層となった知識階級は、一方では下部權力たる地方大姓よりも優位に立ち、この強大化——領主化を抑える作用をなすとともに、他方では、下部權力の代表者、いわゆる『民の望』として、上部權力を支えながらも、その方向を規制する。かくて、この社會層は『士』という身分階層を形成し、その上に文人的な貴族制社會を成立せしめてゆくのである」と述べている。

川勝氏のこの見解に對しては以下の點において疑問を感じる。氏のいう「民の望」とは何かという點である。氏の論旨からすれば、「領主化傾向」をチェックする儒家的イデオロギーの體現が「民の望」たり得ると理解されよう。しかしながら、儒家的イデオロギーは、濁流的在り方に對してはきびしい批判となり得るが、儒家的イデオロギーそのものには「民の望」たる所以が含まれていないのではないか。言い換えれば、黨錮までの時點で、儒家的イデオロギーが、「領主化傾向」をチェックするものであったかどうか疑問である。この點、川勝氏は最近の論文「貴族制社會の成立」において、隱逸的イデオロギー——それは「清」という觀念にもっともよく表現される——を重視し、知識階級はこのイデオロ

ギーに傾斜したとする。とすれば、清流の思想的體質のある轉換を氏は認めていることになる。しかしなぜ清流がそのような轉換をせまられたのか、氏の説明は充分とはいひ難いのである。

この點は次の多田氏の疑問とも關連する。すなわち多田氏は、黃巾・逸民・黨人の運動を一連のレジスタンス運動として規定することは無理ではないかと言う。その理由としては、黨人・逸民は支配の側にあり、如何に支配するかをめぐつて争つたのに對して、黃巾はあくまでも被治者であり、支配者と被支配者が連合することはあり得ないのではないかという點につきる。實は、多田氏と同じ疑問を筆者も感ずるのであるが、多田氏のように、支配者と被支配者という形でその區別を論ずるのは當を得ていないであらう。問題は、黨人・逸民・黃巾のそれぞれの志向の相違を検討することによつて、その區別を論じなければならぬという點にある。川勝氏は、黨人・逸民・黃巾が共同戰線を組んでともに闘つたといっているのではない。彼らが否定すべきであるとした對象と、その否定の原動力となつた彼らの志向するものの間には共通する側面があり、それを「共同體・冀求運動」として當時の社會が何を課題としていたかを見抜こうとしたのである。従つて、多田氏の疑問を正當化する場合には、黨人・逸民・黃巾のそれぞれの志向の差違を摘出し、それによつてそれぞれの運動の異質性を指摘するという手續を踏まなければならない。このことは、先に指摘した、なにゆえに清流が儒家的イデオロギーから隱逸的イデオロギーへと、その思想的體質を轉換せねばならなかつたかという問題に關わつてくる。そのような検討の足がかりとして、筆者は、川勝氏のいう「共同體」をとり上げ、黨人・逸民・黃巾の志向する「共同體」の内容が同一なのか、又異質な面があるのかといった點を検討してみたい。そのためには、まず川勝氏によつて、種々雑多な勢力を含みながらも、儒家理念によつてまとまつた一個の政治運動の集團として捉えられた「清流」を、より具體的に捉えてみることに、そこから、増淵氏が指摘した逸民の人士的清流勢力に對する批判がなぜ生ずるのかを、「名教的天下の秩序と現實との乖離」という側面からさぐる必要があるであらう。

一 清流の出自と構造

増淵氏が言うように、豪族の勢力を、「單に同族的結合や大土地所有によるばかりでなく、それに依附する廣い人的結合關係に基礎を置くもの」とすると、「清流勢力の人的構成を廣い意味での豪族の社會關係に求めることは不當ではない」と考えられる。清流集團の人的構成を分析すれば、清流官僚・逸民の人士、太學生・郡國學生・門生故吏・遊俠的富豪などが含まれるが、まずはじめに、彼らの出自を少しみておきたい。

京師において清流官僚を援護し、世論形成に或る一定の役割を果たした者に太學生がある。結論から言えば、彼らの多くは官僚・豪族の子弟であると考えられる。『後漢書』によつて太學に學んだ者を調べてみると、列傳に「貧」とか「單寒」とある場合には、奨學金やアルバイトの事例が記されているが、その他の出自の不明なものや、官僚・豪族の子弟にはそのような事例は認められない。「貧」・「單寒」と記された人達以外の太學生は、多く官僚・豪族の子弟であつたと理解してよいであらう。^①

次に、清流官僚の場合はどうかというところ、これも既に指摘されているごとく、官僚・豪族の子弟が壓倒的に多い。^②又、清流名士番附の「八廚」と稱されている人々は、宮崎市定氏の指摘にあるように、遊俠的富豪と考えられる。郡國學生や門生故吏は、太學生の場合と同じように、それぞれ豪族の社會關係をその背景にもつていられると思われ。ところが、逸民的人士はこれらの人々とは出自を異にしており、この點は後述することにする。

このように、出自をいくら詮索しても、清流の本質は理解し得ないと思われるけれども、ただ、次の點だけは注意しておきたい。すなわち、太學生、郡國學生は官僚の豫備軍であり、業を卒えた後は、察舉・辟召を経て中央・地方の樞要な官につくべく豫定されているエリートだつたということ、その意味において、彼らは清流官僚と同質性を有している。その兩者が、後漢社會の一個の重要な構成要素である豪族に多くその出自をもつていられることは、我々が黨錮事件を考

える際の一つの要因として、それもかなり重要なものとして取扱う必要がある。それがどのような意味において重要になるかは、論を進めるうちに自ら明らかにするであらう。

次に、これら太學生と清流官僚とが京師において、清流サークルを形成していたことについて述べてみよう。まず太學生に關しては、「太學書生劉陶等數千人、詣闕上書云々」(『後漢書』列傳三十三、朱穆傳)といった類型の記事をいくつか見出すことができるし、あるいはまた、

熹平元年、竇太后崩、有何人書朱雀闕、言天下大亂、曹節王甫幽殺太后、常侍侯覽多殺黨人、公卿皆尸祿、無有忠言者……迺四出逐捕、及太學游生繫者千餘人(『後漢書』列傳六十八、曹節傳)

とあるから、太學生の一團が一つのサークルを形成していたことがわかる。

後漢の太學は、前漢末兵亂のために荒廢していたが、光武帝が建武五年これを修起した。明帝が辟雍をととのえ、太學を取り潰すべしという議論があつたけれども、太尉趙熹の建言によつて兩者並存することになった。ところが、安帝頃になると、博士・學生ともに業を怠り、太學は頽廢して園採芻牧の處となつてしまつた。翟酺の上疏によつて、陽嘉元年、太學は宏大な規模——二百四十房・千百五十室——で修復され、甲乙科員各十人を増し、郡國の耆儒を郎・舍人に任じたため、遊學がようやく盛んとなり、三萬餘生に至つたとある。『後漢書』列傳三十八、翟酺傳、同列傳六十九上儒林傳序などによつて後漢における太學の消長を概觀すれば以上の如くであるが、漢の政治理念たる儒學の修得を目的とし、民衆の教化の具と觀念されていた太學は、しだいに、章句が疏んぜられ、浮華を以つて相い尙び、儒者の風が衰えたと范曄をして嘆かせるような状態に立ち至つたようである。このように、後漢中期以後の太學は、學問の府としてよりもむしろ政治談義の場と化し、政治に志した所謂「遊士」なる者が太學に出入りして、太學内の輿論をリードするという傾向が顯著になつてくる。そのような太學における遊談の花形が、郭泰・賈彪・符融といった人士である。彼らは清流官僚と連絡をとりながら、太學内部の輿論を反濁流の方向に向けていく役目を荷つたのである。それでは、太學生と清流官僚の關

係はどうであつたのか。

第一次黨錮のきっかけとなつた、李膺を誣告した上書の中に、

膺等は太學の遊士を養い、諸郡の生徒に交結し、更に相い驅馳して、共に部黨を爲す。〔『後漢書』列傳五十七、黨錮列傳序〕

とあり、また、

符融は太學に遊び、少府李膺に師事した。〔『後漢書』列傳五十八、符融傳〕

とか、あるいは

太學諸生三萬餘人、郭林宗（泰）賈偉節（彪）は其の冠たり。並びに李膺・陳蕃・王暢とともも相い褒重す。學中語りて曰く、天下の模楷李元禮（膺）云々〔『後漢書』列傳五十七、黨錮列傳序〕

などは、李膺と太學の密接な關係を示唆している。このような李膺に對する人格的歸慕は、李膺自身の人徳に由るのであらうが、

是の時、朝廷日に亂れ、綱紀頽弛す。膺獨り風裁を持し、以つて聲名自ら高し。士の其の容接を被る者有り、名づけて登龍門と爲す〔『後漢書』列傳五十七、李膺傳〕

とあるように、太學生にとつて李膺への接近は仕官の手掛りともみなされているのである。もちろん、李膺は太學生にとつて身近な存在ではないから、その間のパイプ役が必要になる。それが先述の李膺の門徒・符融等だったのである。太學生が符融等の部屋に集まり、盛んに政治談義を行なつて自己の才能を誇示しようとしたのは、仕官のためにすぎなかつたのではないかという解釋も可能になる。清流サークルの結合と種々の利害關係については後述するが、要するに、官僚豫備軍たる太學生と清流官僚の間には密接な連絡があつたことを指摘するにとどめよう。

次に、清流官僚のグループについてであるが、ここでは清流官僚間の關係について觸れておきたい。それは選舉にかか

わることであるが、清流官僚は自派と目される人物を盛んに要職につけていることは注意されてよい。たとえば、

陳蕃爲太傅、與大將軍竇武共秉朝政、連謀誅諸宦官、故引用天下名士（『後漢書』列傳五十七、李膺傳）

とあり、「天下名士」とは、黨錮列傳に記されている人士を中心とする清流派に他ならない。政争下においては、かかる方策も當然必要なことではあろうけれど、清流グループ内における互薦はかなり頻繁に行なわれたものではあるまいか。「三君」の一人陳蕃が汝南太守王龔に引進されて郡吏となった。ところがのちに、陳蕃は王龔の子で「八俊」の一人王暢を勧めており、『後漢書』列傳四十六王暢傳には、「父故吏陳蕃薦暢清方公正」とある。陳蕃も王暢もその人徳によって推舉されたのであろうけれども、このような形式が清流グループの選舉には多く見られたと思われる。これはその政治的主張の善惡はともあれ、清流による選舉の私物化に結果する。濁流が清流に對して多くこの點を批難したのはそれなりの理由があつたのである。

次に、太學生、清流官僚を中心とした中央清流サークルと關係を持ちながら、全國的輿論の形成基盤となつた地方における清流サークルの實態を述べてみよう。

『黨錮列傳序』に、清流の全國的ランキングが載せられているが、そのすぐうしろに、山陽郡高平縣出身の張儉を中心にしたランキング、すなわち、八俊・八顧・八及の二十四名が記されている。これは、張儉と同郷の朱竝の上書によつて判明したものである。この二十四名のうち、まず八俊の筆頭である張儉は、父が江夏太守で、本傳の後半には、黃巾の亂によつて飢渴状態におちいった農民に賑恤したと記されている。このことから、彼は恐らく豪族の出身であろうと思われる。張儉の次は檀彬である。この人物についてはよくわからないが、山陽の檀氏は、鄭玄の『三禮目錄』に「今山陽有檀氏」とあるから、かなり知られた家柄であつたろう。また、『晉書』卷八十五に列せられている檀憑之は、高平の人で、劉裕と共に桓玄と戦い、曲阿縣公に封ぜられている。さらに、『宋書』卷四十三に記載されている宋の名將檀道濟は、憑之の從兄の子で、本貫は高平金鄉である。このように、高平の檀氏は後世有爲の人才を輩出しており、高平における右族

であったと考えられる。二十四名中、正史に傳を記されているものは、張儉・劉表のみであつて、他の人々については不明であるが、張・檀・徐・田・劉・王が高平における著姓であつたと思われるし、二十四名中にそれらの諸姓がみえるから、このグループは豪族が中心となつて形成されていたとしてよいであろう。又、中央でのランキング「八及」の一人翟超が山陽太守となり、張儉を東部督郵に任用して、同郡出身の宦官侯覽の罪惡を摘發せしめているのはきわめて興味がある。同じ清流派人士が守令となつておれば、儒家理念的公權力を背景にして對濁流の鬭争を有利に展開させることが可能であるし、選舉についても、掾史や孝廉への選舉に與ることも容易である。このことは、先に指摘した清流内部における互薦と並んで清流の實態を考える上で注意すべきことである。

ところで、この山陽郡のグループと同様のグループは潁川郡にも見出すことができる。潁川には、荀淑・韓韶・鍾皓などの名族が割據しており、中央清流の領袖、潁川出身の李膺は荀淑に師事し、また、鍾皓とは婚姻關係にあつた。これらの潁川における名族は、それぞれ交友關係・婚姻關係によつて強固な清流グループを形成していた。さらに、潁川においても、中央のランキングにおける「八及」の一人范康が、荀氏の居地すなわち潁陰の令となり、淑の子八人を高陽氏の八子になぞらえ、その居住する里を高陽里としたと傳えられている。地方清流グループと地方官の緊密な結合はここにおいても見出すことができる。

以上、山陽と潁川における地方清流グループについて述べたが、その特徴は、第一に、地方清流グループがただちに豪族連合集團とまでは言えないにしても、豪族がその中核を荷つていたこと、第二に、清流グループと地方官（中央清流の中核人士）の緊密な結合がみられること、が擧げられる。このようなグループは他の地方においても存在したに相違なく、時詔書下擧鉤黨、郡國所奏相連及者、多至數百、唯弼獨無所上、詔書前後切却州郡、髡答掾史、從事坐傳責曰、詔書疾惡黨人、旨意懇惻、青州六郡其五有黨、近國甘陵亦考南北部、平原何理而得獨無（『後漢書』列傳五十四、史弼傳）とあつて、各郡における黨の存在が指摘されている。

又、上記のようなグループではないが、李固が誅殺された時、南陽の董班が李固の屍を守ったというエピソードがある。董班は、太學で李固に師事した門生である。^⑧このように、門生故吏などが地方に散在していて、中央の輿論を盛立てる人的基盤が李固の事例に限らず多く存在したのである。しかも、太學に至る者には豪族の子弟が多いのであるから、彼らはその地方の輿論を牛耳る立場に居た人達であろう。

以上、清流サークルについて具體的にみてきたが、彼らは所謂「儒家理念」なるものによって反濁流集團を結成するのである。次にその「儒家理念」について検討することにする。

二 儒家理念

儒家理念に關しては、すでに川勝氏によって丁寧な説明がなされている。^⑨それは、前漢の董仲舒によって理論的に完成された漢的國家理念に他ならない。すなわち、「國家とは天界の秩序の地上における再現であり、北極星の下にあらゆる天界の星が尊卑の階級的秩序を保ちつつ統率されているように、地上の國家も亦天子の下にあらゆる官吏及び庶民がその階級的秩序を保ちつつ統率されねばならぬ。そして地上における秩序維持の原理が禮に外ならない。」^⑩ここにおいては、君主の大權は當然君主以外の者に掌握されてはならないし、その手足としての官僚は、才能のない者を勝手に任命してはならないということになる。このような儒家理念を標榜する清流派にとって、濁流は右に述べた二點において不適格な存在である。外戚・宦官は君主の大權を壟斷し、^⑪「其の人に非ざる」ような人物を高官に任命し、選舉を不實ならしめているという清流の批判はこの儒家理念に基礎をおいている。

ところで、郷舉里選の正常な運営を要求する清流の主張は、「古い郷邑秩序の急速な崩壊状況を背景にして」生まれてくると川勝氏は言う。この崩壊状況とは、複數豪族による郷邑秩序の分裂によってもたらされるのであるが、「古い郷邑秩序」とは、「父老を中心とする共同體」であり、この「共同體」が「自己の秩序の維持と存續のために、より上部の權

力を要求し、その方向の適合形として漢帝國が形成された」としている。ところで、漢一代を通じて、豪族の「領主化傾向」によって、「父老を中心とする共同体」秩序が崩壊してくるのが丁度黨錮の時期に當り、郷里にあっては複数の豪族が對立している。複数豪族の一方が上位權力（外戚・宦官）と結託し、その保證のもとに郷里に支配を及ぼそうとすれば、他方の豪族は、反濁流勢力としての清流を形成して「抵抗」せざるを得ない。ここに、清流内部に富裕な豪族が含まれている理由があると氏は考える。筆者は、増淵氏の、郷邑の秩序が豪族によって維持されていたとする點を批判した川勝氏のこの見解は正しいものと考ええる。しかしながら、川勝氏が、濁流に對する清流の主張を、ただちに古い郷邑秩序再建の要求と捉えている點に疑問を感じる。清流はすでに見たように豪族によってその中核部分が荷われているのである。「父老を中心とする共同体」にとつて敵對物たる豪族が再建しようとする秩序は、漢の本來的な、川勝氏の言う、自立農民のフラットな關係によって成立している「里共同体」ではあり得ない。それは、増淵氏の言うような、豪族が父老という形態をとりつつ秩序を維持している共同體的構造をもった郷里社會ではなからうか。清流の主觀はともあれ、少くとも現實的には、清流の主張は、豪族によって維持された郷里のイメージにその根據をもっているのではあるまいか。

後漢時代は、前漢ほどには國家による豪族彈壓は遂行されていない。むしろ、豪族の郷里社會における支配力を認め、豪族を官僚として登用することによって地方行政を圓滑ならしめんとしている。官吏登用法である郷舉里選制度も、儒學の豪族層への浸透という事態と相俟つて、豪族の郷里社會における地位を保證する制度へと變質していったものではなからうか。豪族層は、郷舉里選制度によって、中央・地方の官界に進出し、自己の郷里における地位を確實なものにせんと意圖したのである。そこでは、國家と豪族が相い補う關係に在ったといえる。この關係を儒學にもとづいて表現したのが儒家理念であったと推測される。このような後漢社會が和帝の頃からそのバランスを失い始め、川勝氏の言う、複数豪族が對立する、引裂かれた郷邑社會が出現する。その原因の一つが、上位權力を利用した外戚・宦官と、それに結託した濁流系豪族の露骨な「領主化傾向」にあると考えられる。清流はかつて存在した豪族にとって安泰な社會の再現を求めて鬭争

したのではないか。この點について、彼らが何故にあれほどまでに選舉の問題に固執したのかという觀點から追求してみたい。

三 察 舉 體 制

周知の如く漢代における郷舉里選の制度は、先述した漢の國家理念に則とり、君主を輔佐すべき賢者を登用することをその使命とする。その場合、郷里の住民の評判（郷評）をその選用基準とするところに特色がある。郡太守はその郷評をもとに、諸々の科目に適合した人物を中央に推薦する。

ところで、後漢になると、選舉の科目がおおむね孝廉科に統一されてくるのであるが、孝廉に推薦されるのは、まず郡吏に採用され、そのうち太守によって孝廉に推薦されるケースが壓倒的に多い。もちろん、布衣から擧げられる場合も存するが、それはむしろきわめて特異な人物に限定されている。一般には、功曹・主簿・督郵など、郡の右職についたのち太守が推薦するというコースが普及していた。ところが、増淵氏によれば、郡縣の掾史はほとんどその地方の豪族の占めるところとなっていたことが指摘されている。ここから、孝廉に擧げられる人士の多くは、豪族出身者であることが推論されるのである。

（朱）穆少くして英才有り、學は五經に明るく、性は矜たかく嚴きびしく、惡にくを疾きらみ、非類と交わらず、年二十にして郡の督郵となり、新太守を迎う。（太守）穆を見て曰く、君、年少にして督郵となるは、族執に因るか、令徳あるが爲か、……遂に股肱を歴職し、孝廉に擧げらる。（『後漢書』列傳三十三、朱穆傳注所引謝承書）

朱穆は南陽宛の人、家は「世衣冠」である。太守の「君は若冠二十にして郡の督郵になったけれど、それは族執の援助があったためか、それとも令徳によるものか」という質問は、當時の人々の選舉に對する常識がはしくも太守の口から洩れたことを教えている。「族執」とは、その一族の社會的經濟的な勢力を指すと思われるが、このエピソードは、地方

の有力豪族が掾史の官位を獨占し、さらに、孝廉の選舉までも左右していく情況がかなり普遍的であつたことを示している。^⑧

このように、豪族層が選舉を獨占できるのは、かれらが太守に對して政治的發言力を有しているためだけでなく、豪族集團の構造にも由るのである。范曄が黨錮の契機となつたと指摘する甘陵南北部の對立^⑨においては、兩家それぞれの主張が、賓客によつて風謠の形態をとつて傳えられている。實際の鬭争も賓客たちによつて行なわれたであらう。ここで注目したいのは、これと同じパターンが當時の郷里社會にも普遍的に存在し、それと選舉とが密接な關係を持っていたことである。要するに、豪族はその賓客などを動員して、風謠あるいは暴力的威嚇によつて、郷里社會の輿論を左右することが可能だったのであり、このために、郡守は豪族出身者を推舉することを餘儀なくされるのである。朱穆の場合の「族執」なる語もそのような實情を指していると考えられる。^⑩ 筆者は、このような豪族層による選舉獨占とそれにもとづく豪族の支配體制を「察舉體制」と呼びたい。

かくのごとき狀況は、清流官僚と「單微」な人士を比較してみるといっそう明白になる。中央清流ランキングの「三君」以下三十五名のうち、有傳者は二十七名であるが、そのうち二十三名は少くして孝廉に舉げられたり、「辟公府」の榮譽に浴している。^⑪ 一方、「單微」な人士の場合は、仇覽は先述したように四十に至るまで推舉されず、獎學金を支給されて太學に入った。太學にあつて符融等に尊敬され、はじめて州郡は競つてこれを舉げたとある。郭泰も「世々貧賤」であつたために、名を知られるようになるまで舉げられなかった。鄭玄は遊學十餘年の後も察舉・辟召を受けず東萊に客耕していた。「知名の援」がなかったからである。

以上のごとく清流派の中核の人士と單微な人士の選舉における差違は、先述した豪族による郷里選制度の獨占を示すものに他ならない。このように見てくると、清流があれば選舉に固執した理由も自ら明らかになるのではなからうか。いま選舉請託の型式を分類してみると、

- (一) 外戚・宦官が自己の一族や賓客などを、中央官僚に壓力をかけて、敕任官に任命させたり、辟召させたりする。
- (二) (一)によって地方官となった者に請託して、地方の掾史につけたり、孝廉に推薦させたりする。
- (三) 中央から直接太守などに請託して地方官衙の掾屬とさせる。

の三種になる。この中で、(二)のケースがもっとも多かったと推測されるが、(二)のケースは、地方豪族の利害關係に直接影響があることに注意しなければならない。従って、清流による濁流の選舉請託批難は、自己の既得權を擁護するところにその根據をもっているという解釋も可能である。

以上、豪族層によって郷舉里選制度が獨占され、豪族出身者を多く包含する清流はこの制度によって官僚たり得たことを述べた。しかしながら、郷舉里選に推舉されるためには必ず豪族でなければならなかったかという点、それは恐らく當時の實情に即していないというべきであろう。周知のように、孝廉科に推薦されるためには、至孝・至廉な人物であるという郷評が必要條件であって、そのような人格をもたない人士は、二十萬人に一人という選舉に與れないのである。事實、清流派の人士が、郷舉里選の徳目に適う人格を有していたことは、彼らの言動を通して知られるのであり、彼らが豪族であったから選舉に與かれたとするのは誤りとせねばなるまい。この點、當時の豪族内において分業が成立していたとする上田早苗氏の見解は認めなければならないが、しかしそれをもって當時の豪族は「領主化傾向」とそれをチェックする儒家的イデオロギーによる自己矛盾的性格を有していたとするのはどうであろうか。むしろ先述したように、儒家的イデオロギーによって公的權力を援用しながら、同族の郷里支配を補完するのが、官僚學者家の役割ではなかったろうか。その要が郷舉里選制度であったのである。ところが黨錮の時點において、この察舉體制にひびが入る。その原因が濁流の選舉請託であり、他は郷里社會の崩壊である。

そもそも郷舉里選の諸科が後漢になると孝廉科に統合されてきたのは、從來よりよくいわれるように、後漢における儒學の普及にその原因がある。後漢では特に「孝」が重視された。「孝」は家族的な場における倫理道德であって、それが

實踐される場として、漢代においては、家族・宗族とその擴延した郷里社會があつたと考えられる。^⑨郷里社會では、父老——子弟という年齒による秩序の維持が行なわれていた。^⑩恐らく、郷舉里選制度は郷里におけるこのような人間關係によつて裏打ちされていたと理解される。ところが、後漢中頃から、羌人の侵入、天災飢饉などによる流民の發生が相つぎ、郷里社會が動搖をきたしてくる。もちろん、郷里社會内部の矛盾——豪族と小民の支配被支配關係——がこの時期に顯在化して、それが郷里社會を破壊する主要な原因となつたであらう。とにかく、郷舉里選を支えていた人間關係が崩壊してくるのが、後漢中期以後の社會の實相であつた。

このように考えると、郷舉里選の正常な運営を要求する清流の主張は、郷里社會における健全な人間關係がすでに喪失された時期にあつて、現實にはすでに崩壊した郷里社會の在り方を前提としているものとしてとらえる。すくなくとも、清流の現状分析はこの點において誤りを犯しているのである。儒教の徳目に適つた行爲をとればとるほど、現實から遊離してしまうという矛盾の中に彼らは活動していたわけである。このような清流派の自己矛盾的體質は一體何處に基因しているのであらうか。それはやはり、彼らがすでに喪失された郷里社會の人間關係に或る程度基礎を置く察舉體制を維持することによつて、後漢豪族支配體制を存続せしめようとした點に求められるのである。増淵氏の指摘した、清流の持つ浮華的性格や政治主義による自己撞着はすべてここにその原因があるのではなからうか。

四 逸民の人士の清流批判

ここに言う逸民の人士とは、増淵氏によつて指摘された仇覽・袁閔、あるいは、『後漢書』列傳四十三に載せられている徐穉・姜肱・魏桓・申屠囂等の人々を指す。これらの人々の清流批判はすでに増淵氏によつて詳しく分析されているが、彼らの隱逸の動機や、清流批判がどのような意味をもつかについては、増淵氏も問題を提出したにとどまっている。以下この點にふれてみよう。

ここであらかじめ断っておかねばならないのは、黨錮の時期における逸民的人士の輩出についてである。これについての侯外廬氏らの見解は、「政治上の黨錮と時を同じくして、思想上にもまた清議の禁錮があった。禁錮された清議は、轉向を開始して別に出路を求めざるを得ぬ、その結果、清議が轉じて清談となった」。そしてその轉向の契機は、郭泰・徐穉・荀淑・陳寔などにみられるとする。しかし筆者は、この時期には二種の隱逸の仕方があったと思う。一つは、黨錮以前にすでに隱逸的生活を選んでいた所謂逸民的人士、他は、黨錮が起る氣配を察して政界から身を引いた人々である。後者については、例えば潁川の荀爽が、清流の領袖李膺に手紙を送り、禍害を避けるために隱逸すべきことを勧告しているが、それは第一次黨錮の後のことである。これは、儒家の出處進退の理念からすれば當然のことである。賢人たるものは、世亂れば隠れるべきであると、『論語』や『易』にも言っている。この理念は、世治まれば政界に復歸することを前提している。これに對して、前者の人々は、黨錮以前に何らかの理由によって隱逸したのであって、政治的敗北によるものではない。隱逸の契機は各人それぞれ異なるであろうが、彼らに共通する點は、當時の知識人の運動體たる清流への参加を拒否していることである。従って、彼らの清流批判を検討すれば、彼らの隱逸の動機や、彼らの批判が一體どこに由來するのかが理解できるのではないかと思われる。

仇覽が太學へ詣った時のエピソードが范曄によって次のように伝えられている。

覽太學に入る。時に諸生同郡の符融高名あり、覽と字を比べ、賓客室に盈つ、覽常に自守し融と言わず。融其の容止を觀て心に獨り之を奇とす。乃ち謂いて曰く、「先生と郡壤を同じくし、房牖を隣りにす。今京師は英雄四集し、志士交結するの秋なり。經學に務むといえども、之を守ること何ぞ固きか」。覽乃ち色を正して曰く、「天子の太學を修設せしは、豈に但だ人をして其の中に遊談せしめんとするのみならんや」。高揖して去り、復た言わず。〔『後漢書』列傳六十六、

仇覽傳〕

この仇覽の批判は、ただ單に遊談のもつ浮華的要素に對してのみ向けられているのであろうか。後漢における太學の機

能についての觀念^③や、當時の儒者の基本的テーマ・禮教の實踐^④などを勘案してみた場合、そこには次のような意味がこめられてはいないか。すなわち、經學に務めるのは、自己の徳性を涵養し、實踐さるべき禮的規範を踐み行ない、民衆を教化し、天子を輔佐すべき賢者（官僚）となるためなのであると。ここでは、儒學の修得と實踐とが密接不可分なものとして觀念されている。符融等は眞の意味で徳性を涵養し、禮的規範を實踐し、郷里において民衆を教化することのないまま政治談義に熱中していると仇覽は考えたのではなからうか。

ところで、これら逸民の人士の多くが、「世宦的豪族」でないという點にも注意することが必要である^⑤。先述したように、彼らは察舉體制から疎外されたと思なされるが、彼らの清流批判は、そのような疎外された者としての反感からくるものではない。仇覽の場合のごとく、儒學の修得はただ浮華交會のためにあるのではなく、儒教的倫理をもって自己をきびしく律し、士人としての責務、すなわち、郷里の教化に當ることを果たすためにあるという思想に根ざしている。彼らは、疎外された者であつたればこそ、清流がその責務を果していないことを洞察しえたのであろう。仇覽の亭長としての實踐は以上のことを雄辯に物語っている。彼が蒲の亭長をしていた時の記事に、

勸人生業、爲制科令、至於果菜爲限、雞豕有數、農事既畢、乃令子弟羣居、還就饗學、其剽輕游恣者、皆役以田桑、嚴設科罰、躬助喪事、賑恤窮寡、期年稱大化（後漢書）列傳六十六、仇覽傳）

とある。この内容を分析すると、(一)果菜雞豕の量的制限、(二)教育活動、(三)遊俠無賴の指導、(四)郷里への施惠、の四點にまとめられる。(一)は郷里の構成員間の格差をなくすることを意圖しているのであろう。經濟的な實力を或る程度均等にすることによって郷里社會内部での上下關係を解消し、後漢時代に普遍的に見られる、郷人が豪族に奴隸の如く事^{つか}えるというような狀況を克服せんとしたと思われる。(二)は、教化を目的とするものであつて、農閑期に郷里の子弟を集めて種々のことを教育したのであろう。(三)は農本主義の立場から言つて排除さるべき者、末を務める遊俠無賴の輩を科罰によつて本に復歸させること、(四)は、郷里における重要な行事の一つである喪事の主辦並びに郷里における孤寡貧窮の救濟である。

この仇覽の郷里社會への働きかけが、その地域の豪族とどのような關係をもち、どの程度奏效したかよくはわからない。しかし、ともあれ、當時すでに階層分化が激しく、豪族の制肘するところとなっていた郷里社會を、少くとも本來の郷里社會——郷人がその中で自立的に生活する場としての——に復歸させる意圖をもっていたのではあるまいか。

(陳)寔在郷閭、平心率物、其有爭訟、輒求判正、曉譬曲直、退無怨者、至乃歎曰、寧爲刑罰所加、不爲陳君所短(『後漢書』列傳五十二、陳寔傳)

陳寔は同郡の鍾皓と交友關係にあり、皓は郡の著姓であり、「世々刑律を善くする」家柄であつた。従つて、寔も刑律に精通していたと推測される。郷里の人々が彼に事件の判正を依頼したのもこのような事情に由るのであらう。ここで注目したいのは、「むしろ刑罰の加うる所となるも、陳君の短る所とはならじ」という郷里の住民の意識である。「梁上君子」で著名な陳寔の郷里における存在は、郷人の崇拜する對象とされ、その陳寔に短られるよりは刑罰についた方がよいとする郷人の意識は、陳寔による人格的支配を可能にしていると言つてもよい。陳寔は漢本來の郷里社會における秩序維持の中心的存在たる「父老」の役割を果していると思われる。ただ、「父老」と異なるのは、秩序維持の原理がその人格・徳望に由っている點である。恐らく、先に見た仇覽の亭長としての指導もここに基礎を置いているのではないかと思う。この兩者の郷里における實踐は、形態や方法に異なつたところがあるにしろ、濁流の小民壓迫によつて塗炭の苦しみに喘ぐ農民とともに、郷里社會の秩序再建を圖ろうとするものであり、それはまさしく川勝氏の所謂「共同體冀求運動」であつたと言える。

以上のように見てくると、川勝氏の所謂「共同體冀求運動」の「共同體」の内容が、清流と逸民の人士とではその志向するところが異つているのである。清流の意圖は察舉體制の維持に重點が置かれていた。その體制は、豪族が豪族本來の力による支配を貫徹しようとして、郷里の人々との間に矛盾を内包している。一方、逸民の人士の活動は、豪族の支配下に喘ぎ、崩壞の危機にさらされている郷里社會を、郷里の人々との共同のもとに新たに再編せんと志向するものに他なら

ない。そこには、郷里社會の支配を目指す後漢豪族の在り方を否定した、新たな郷里社會を主宰する士人が出現し始めているのである。我々はこのような在り方を追求した士人を魏晉の社會においても發見することができる。例えば、

遇歲饑饉、路有餓殍、（王）烈乃分釜庾之儲、以救邑里之命、是以宗族稱孝、鄉黨歸仁、以典籍娛心、育人爲務、遂建學校、敦崇庠序（『魏志』卷十一管寧傳注所引先賢行狀）

あるいはまた、

（管）寧所居屯落、會井汲者、或男女雜錯、或爭井鬭鬩、寧患之、乃各買器、分置井傍、汲以待之、又不使知、來者得而怪之、問知寧所爲、乃各相責、不復鬭訟、鄰有牛暴寧田者、寧爲牽牛着涼處、自爲飲食、過於牛主、牛主得牛、大慙、若犯嚴刑、是以左右無鬭訟之聲、禮讓移於海表（『魏志』卷十二管寧傳注所引皇甫謐高士傳）

とあり、この二つの例からも、仇覽等と同じように、王烈・管寧が物を私することのない清い生活を送り、郷里の中心的存在となっていたことがわかる。彼らの生活のモットーは「清儉」であり、それ故にこそ郷里の信頼をかち得たのである。後漢的儒家イデオロギーを、「清儉」という一種の經濟倫理にまで高めることによって彼らは「共同體」の長になり得たわけである。

筆者はここに、清流と逸民の人士との間に存在する斷絶を見出したい。また、黄巾の亂については、詳述する準備がないが、川勝氏が清流と黄巾の連帶の可能性として擧げている袁閔・徐胤・鄭玄の三人——黄巾はかれらを「賢者」として害さなかった——は筆者に言わせれば皆逸民の人士である。また黄巾の亂の豫測が楊賜によってなされており、楊賜は清流派に所屬する劉陶にこの對策を語っている^⑧。これらの事實を綜合すれば、黄巾と清流の連帶の可能性はうすいとせねばならない。

五 黨錮後の動向——結語に代えて——

一六六・一六九年の二回にわたる黨人の彈壓、とりわけ一六九年の大彈壓によって、官界から清流派の官僚は一掃され、或いは自殺・處刑、或いは隱身・亡命を餘儀なくされた。ここにおいて、後漢政府は、宦官とそれに結託する濁流系豪族に左右せられ、濁流による郷里社會の破壊が加速的に進行したであろうことは推測に難くない。^⑧一八四年に勃發した黃巾の大亂は、濁流の農民壓迫が集中的にこの時期に行なわれた結果に他ならない。

一方、官界から追われた清流人士は、郷里において如何なる生活を送っていたであろうか。黨錮列傳によれば、かれらのうちほとんどが黨人大赦までに「卒於家」とあつて、その具體的な生活はよくわからない。ただ、張儉だけが黨人大赦の頃まで延命しており、その生活について、

中平元年、黨事解け、乃ち郷里に歸る。大將軍、三公並びに辟し、又敦牒に擧げられ、公車もて特に徵され、起家して少府に拜さるるも皆就かず。獻帝初め、百姓饑荒す、而るに儉の資計差や溫る。乃ち財産を傾竭し、邑里と之を共にす、頼りて其の存する者、百を以て數う。〔後漢書〕列傳五十七、張儉傳

とあり、黨錮が解けてからの張儉の生活は、郷里に居住して郷人の中心的存在であつたことがわかる。彼は先述したように、山陽高平の豪族の一員であると考えられるが、黨錮事件における挫折によって、彼の志向が中央官界或いは地方官界から自己の存在基盤たる郷里へ下降したことを推測せしめる。

黨錮によって、清流派の據つて立つ「儒家理念」は完全に破砕され、宦官政府の銅臭に満ちた濁流路線が前面に進出する。ここにおいて、宦官と結んだ濁流系豪族が他の清流系豪族よりも優位に立ち、郷里における地位を確立していったに違いない。これに對して清流系豪族は、後楯にしていた儒家理念にもとづく公的權力を失なつてしまつた以上、宗族・賓客とともに、郷里における自己の地位を維持しようとする。張儉が郷里の中心的存在となつてその秩序維持を意圖した理

由はここにあると思われる。

ところで、張儉が郷里に歸つた年は中平元年で、丁度黃巾の亂が勃發した年である。彼の郷里山陽高平は、黃巾の亂の指導者張角の根據地たる鉅鹿に近いから、彼の郷里の周邊にも黃巾の民衆の動きがあつたであらう。このような農民反亂のインパクトが、張儉の例にみられるような豪族の轉向の一理由になるであらう。

以上、清流系豪族の轉向の要因として、黨錮による清流の挫折とそれによる濁流路線の確立、そしてそこに基因する黃巾の亂が豪族に與えるインパクトなどが挙げられることを述べた。彼ら豪族は、否應なしに「邑里と之を共にする」という在り方をとらざるを得ない。これが川勝氏のいう隱逸的イデオロギーへの傾斜ということであらう。清流は黨錮・黃巾の亂を経過することによって始めて自己の後漢豪族的體質を克服せねばならないことに氣づいたのである。それは、漢代社會における郷里共同體と豪族との間にある大きな矛盾を自覺したと言ひ換えてもよい。

川勝氏は、「貴族制社會の成立」(『岩波講座世界歴史』古代5所收)において、黨錮事件後、知識階級一般の風潮が「隱逸君子」に傾いたとし、そのような知識人豪族の自己否定的な生活態度は、郷邑社會の崩壞の中で、共同體關係を維持・再建しなければならんとする必要から生れたのである。そこにおける生活理念は「清」であり、それによってこそ「民の望」たり得たのであると言う。これはある面で承認しなければならないが、しかし、知識人豪族の課題である共同體原理と階級的原理の統一は、魏晉期において一舉に解決されたわけではなからう。

曹操政權に参加したのは、潁川の荀氏、陳氏など、大體清流派の系譜を引く人々であり、彼らによって九品中正制度が制定され、貴族制の基礎が形成されていくが、彼らはなお清流の體質を拂拭できなかったのではなからうか。貴族制は西晉に入ると家柄の固定化という現象を招く。川勝氏のこの點に關する説明は、「中正制度の運用面における問題」であつて、中正制度の原理とは次元を異にするものであるとする。しかし、たんに「運用の問題」に解消してしまつていいだらうか。その運用の仕方を規定した構造が魏晉貴族制の中に存在したのではあるまいか。臆測ではあるが、家柄の固定化と

いう現象はすでに後漢末の清流の中に胚胎していたのである。すでに述べたように、「儒家理念」は察舉體制を維持するイデオロギーであって、彼ら清流派は彈壓によって一時的に隱身せざるを得なかったが、曹操政權成立の過程で官界復歸を果たし、新たな隱逸的イデオロギーによって貴族制體制を確立したのである。そのような清流派の體質の殘存が家柄の固定化という現象を生み出したのではなからうか。その意味においても、貴族制の源流が後漢末期の清流にあるとする川勝氏の見解は認めなければならぬ。

これら魏晉貴族制の問題は稿を改めて論じなければならないが、ただ以後の貴族制の推移を概観すれば、清流のもつ豪族の體質をなお多分に殘した貴族と、一方では隱逸的イデオロギーを眞に體得した逸民的人士の存在とその兩者を含みながら貴族制が形成されたし、その故に、貴族制の門閥主義化に對する挑戰が、逸民的人士の側から南朝を通じて行なわれたのである。

註

① 以下、前者を第一論文、後者を第二論文と略稱する。なお、氏には「貴族制社會の成立」(『岩波講座世界歴史』古代5)があつて、黨錮に言及している。それは、第二論文とは論調をかなり異にするが、その基本的な論旨は同一なので、ここでは第二論文を川勝氏の見解として扱う。

② 「東漢の豪族」(『清華學報』十一卷四期)

③ 「書評・楊聯陞『東漢の豪族』」(『東方學報』京都九冊)

④ 「後漢黨錮事件の史評について」(『一橋論叢』四十四卷六號)。

なお、増淵氏と共に川勝説を批判したものに、矢野主税「門閥貴族の承譜試論」(『古代學』七卷一號)があるが、これに對する川勝氏の反批判「貴族制社會の成立」は、矢野氏に對する批判とし

て正當であると私は判斷する。

⑤ 多田狷介「後漢後期の政局をめぐって——外戚・宦官・清流士人——」(『史學研究』七六)

⑥ 「後漢書」列傳六十六、仇覽傳、同列傳五十二、陳寔傳注所引袁宏紀、同列傳五十八郭泰傳注所引泰別傳、同列傳五十四、吳祐傳等參照。

⑦ 「後漢書」列傳二十一、孔奮傳集解惠棟所引東觀記に、「奮篤於骨肉、弟奇在洛陽爲諸生、分俸祿以供其糧用、四時送衣、下至脂燭、每有所食甘美、輒分減以遺奇」とあり、父兄によってその生活が保證されていたであらう。

⑧ 金發根「東漢黨錮人物的分析」(『歴史語言研究所集刊』第三十 四本、故院長胡適先生紀念論文集下所收)

⑨ 宮崎市定『アジア史研究』第二、百頁。

⑩ 増淵前掲論文参照。

⑪ 又、清流官僚が太學生に對して金錢或いは物資を施與したことが傳えられている。『後漢書』列傳十七趙典傳、同列傳五十九竇武傳参照。

⑫ 例えば、『後漢書』列傳五十三、李固傳に「太尉李固因公假私、依正行邪、離間近戚、自隆支黨、至於表裏鷹犬、例皆門徒、及所辟召、靡非先舊……」とある。

⑬ 宮川尚志『六朝史研究・政治社會篇』一九八頁参照。

⑭ 『後漢書』列傳五十七、張儉傳。

⑮ 『後漢書』列傳五十二、鍾皓傳。

⑯ 『後漢書』列傳五十二、荀淑傳。

⑰ 『後漢書』列傳五十三、李固傳注所引楚國先賢傳。

⑱ 前掲川勝第一論文参照。

⑲ 好並隆司「曹操政權論」(『岩波講座世界歴史』古代5所收)は宦官執政を皇帝獨裁的體制を指すものとして把え、この體制内に自己の權益を確保しようとする土豪層と、これに對する豪族・富農層の三者鼎立の争いとして黨錮を理解する。しかし宦官は、皇帝の財たる鹽稅をも私物化しようとしており、『後漢書』列傳五十四、史弼傳、私權化への志向はあつても、皇帝獨裁體制とは無縁であると考えられ、外戚の執政を、豪族權力の形成とするのも無理がある。又、富農と土豪の區別も明確でないで、この點は今後の研究に俟ちたい。本稿では川勝氏の複數豪族の競合對立の見解を採る。なお、濁流については、江幡眞一郎「後漢末の農村の崩壊と宦官の害民について」(『集刊東洋學』二二)が詳し

い。

⑳ 川勝義雄・谷川道雄「中國中世史研究における立場と方法」(『中國中世史研究』所收)。

㉑ 増淵龍夫「所謂東洋的專制主義と共同體」(『一橋論叢』四十七卷三號)参照。本文で述べた豪族の郷里支配の代表的な例として、南陽の樊氏がある(『後漢書』列傳二十二、樊宏傳)。因みに言えば、樊氏の場合は、豪族即父老(三老)という形態であつたが、後漢末になると、豪族が父老を媒介として民を支配するという形態へ變化し、父老固有の存在理由がなくなってくる。例えば、田疇の共同體にみられる豪族と父老の關係(『魏志』卷十一、田疇傳)や、『後漢書』列傳六十、荀彧傳における「或謂父老曰……」の條など。なお、豪族の郷里支配を農業經營の面から考察したものに、多田狷介「後漢豪族の農業經營」(『歴史學研究』二八六號)がある。

㉒ 永田英正「漢代の選舉と官僚階級」(『東方學報』京都第四十冊)参照。

㉓ 上田早苗「巴蜀の豪族と國家權力——陳壽とその祖先たちを中心に——」(『東洋史研究』二十五卷四號)参照。なお、黨派を同じうする官僚を自己の出身郡の太守にあてようとした例がある。史敳が出身地陳留郡の太守の職が缺員となつたとき、ともに左雄の政策に反對した胡廣を陳留太守に推薦している。その事は成らなかつたが、胡廣はのち濟陰太守となり、「舉吏不實」で免官されている。後漢書列傳三十四、胡廣傳参照。

㉔ 他の原因として、後漢一代を通じて、新興の豪族が出現し、既成の豪族との對立が激しくなつた事情も考えられるかもしれない。

い。江幡前掲論文はこの點を指摘している。

25 永田前掲論文。

26 「所謂東洋の專制主義と共同體」(前掲)。

27 永田英正「後漢の三公にみられる起家と出自について」(『東洋史研究』二十四卷三號) 参照。

28 『後漢書』列傳五十七、黨錮列傳序参照。

29 風謠については、侯外廬・趙起彬・杜國庠・邱漢生「中國思想通史」第十章第三節「漢末の風謠題目與清議」参照。

30 非豪族なる故に選舉から疎外された例として仇覽の場合があげられる。(『覽』終身無泄狎之交、以是見憚、學通三經、然無知名之援鄉里之舉、年四十召爲縣主簿)(『後漢書本傳集解惠棟所引陳留耆舊傳』)。ここに言う「知名之援」は朱穆の場合の「族執」に當ると考えられる。

31 残りの四名のうち、岑晷は父が貪叨を以て誅されたことが影響しているのではないかと思う。劉表は黨事が起つてから成年に達したためで、郭泰は太學へ行つてその名を清流派の人士に知られたのち考廉に擧げられている。荀昱はのち沛相になっているから恐らく考廉に擧げられたのであろう。なお、二十三名中、檀敷、夏馥という「單微」な人士も含まれていて例外的事實も存する。ただ檀敷については、一族が有力であったことが與つて力があつたのではなからうか。

32 『後漢書』列傳四十四、楊震傳。

33 『後漢書』列傳五十三、李固傳。李固の對策に、「又詔書所以禁侍中尚書中臣子弟不得爲吏察孝廉者、以其秉威權容請託故也、而中常侍在日月之側、聲執振天下、子弟祿任、曾無限極、雖外託

謙默、不干州郡、而詔僞之徒、望風進舉……」とある。

34 例えば『後漢書』列傳五十二、陳寔傳に、「時中常侍侯覽託太守高倫用吏、倫教署爲文學掾」とある。

35 『後漢書』列傳四十六、王暢傳に、「尋拜南陽太守、前後二千石逼懼帝鄉貴戚、多不稱職、暢深疾之、下車奮厲威猛、其豪黨有聲職者、莫不糾發、會赦事得散、暢追恨之、更爲設法、諸受臧二千萬以上不自首實者、盡入財物、若其隱伏、使吏發屋伐樹埋井夷竈、豪右大震、功曹張敞奏記諫曰……、暢深納敞諫」とあり、功曹が太守の豪族彈壓を緩和する役割を荷っていることがわかる。このように、郡の據屬、特に功曹など郡の右職は當地の豪族にとって重要なものである。だからこそ、先述したような豪族層による據史獨占も行なわれたのであろう。

36 上田早苗前掲論文。

37 宇都宮清吉「中國古代中世史把握のための一視角」(『中國中世史研究』所收) 参照。

38 西嶋定生「中國古代帝國の形成と構造」東京大學出版會。

39 多田狹介「黃巾の亂前史」(『東洋史研究』二十六卷四號) 参照。

40 鄉里社會の崩壞については、大淵忍爾「中國における民族的宗教の成立」(『歷史學研究』一七九・一八一號、後同氏著『道教史の研究』に收録) 参照。

41 『中國思想通史』四〇四頁。

42 『後漢書』列傳五十七、李膺傳。

43 『後漢書』列傳二十下、襄楷傳に「太學天子教化之宮」とあり、同列傳二十三、朱浮傳には、「夫太學者禮義之宮、教化所由

興也」とある。

④④ この点については、宮崎市定『漢末風俗』（『アジア史研究』第二所収）参照。

④⑤ 金發根前掲論文参照。

④⑥ このような事例は、『魏志』卷十一、管寧傳注所引高士傳、先賢行狀にもみえる。

④⑦ 『後漢書』列傳四十四、楊賜傳。

④⑧ 『後漢書』列傳四十二、崔寔傳に、「靈帝時、開鴻都門、榜賈官爵、公卿州郡下至黃綬各有差、其富者則先入錢、貧者到官而後倍輸」とあり、官による農民收奪の激しさはここからも充分推知することができる。

④⑨ 『後漢書』列傳五十八、賈淑傳に

賈淑字子厚、林宗鄉人也、雖世有冠冕、而性險害、邑里患之、林宗遭母憂、淑來修弔、旣而鉅鹿孫威直亦至、威直以林宗賢而受惡人弔、心怪之、不進而去、林宗追而謝之曰、賈子厚誠實凶德、然洗心向善、仲尼不逆互鄉、故吾許其進也、淑聞之、改過自厲、終成善士、鄉里有憂患者、淑輒傾身營救、爲州閭所稱。

とあり、郭泰の訓導によって、豪族賈淑が轉向したことが述べられていて興味深い。

會 告

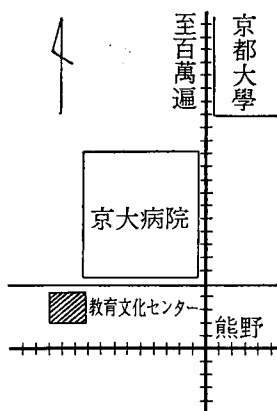
東洋史研究會大會を左記の要領で開催致しますので多數御参加下さい。

記

十一月三日（祝）

於 京都教育文化センター

（京都市左京區聖護院河原町四ノ一三）



東洋史研究會

The Ortaq-qian 幹脫錢 (Loan for Ortaq) and its Background

Matsuo Otagi

The outline of the Ortaq-qian 幹脫錢 (loan for Ortaq), which appears in Chinese literature under Mongol rule in the 13th century, has previously been discussed. In this article, the author supplements existing studies and clarifies its actual conditions. Further, he insists that we should not understand it narrowly as a peculiar institution of China under Mongol rule. We should understand its real importance in broader perspective, analysing its essence and tracing its origin.

Ortaq, a particular group of Central Asian 西域 merchants, to whom was entrusted silver by the Mongol ruling class for the purpose of earning of its, lent the silver out at high interest and garnered much profit into their own hands as their share.

It was only natural that a huge amount of silver in their hands was carried to the West. But the prerequisite for such export of silver was the differential cost of silver between the East and the West. This difference between the two economic worlds, that is, the Islamic world and China, was a long-term phenomenon from the 10th century to the 13th century. A rough sketch on this theme will begin with confirmation of this phenomenon.

On the Qing-liu 清流 Party at the End of the Later-Han 後漢 Dynasty

Shinji Higashi

The so-called Dang-gu 黨錮 affair (the proscription of the literati) at the end of the Later-Han 後漢 period appears to have involved a conflict between the Qing-liu 清流 (Pure) party and the Zhuo-liu 濁流

(Turbid) party, and the suppression of the Qing-liu by the Zhuo-liu. The Qing-liu party consisted of bureaucrats, tai-xue-sheng 太學生 (imperial university students), jun-guo-xue-sheng 郡國學生 (provincial students), and rich men who behaved like you-xia 游俠的富豪. Most of them belonged to the great families. The local Qing-liu cliques were also led by persons who hailed from the great families. The Qing-liu aimed to maintain the great families' local control by the cha-ju 察舉 system, which had been established in the course of the Han period, and by monopolizing the Xiang-ju-li-xuan 鄉舉里選 system and becoming bureaucrats. The Confucianism on which they based their criticism against the eunuchs, functioned as the ideology which assisted them in maintaining the cha-ju system whereby the relations between the state and the great families complemented each other. However, as the majority of the Qing-liu party hailed from the great families, which were contradictory to the Xiang-li 鄉里 society of the Han period, the Qing-liu movement was after all not able to unite with the masses of Xiang-li society.

This is the reason for their defeat and the appearance of recluse-like personages (逸民的人士) who aimed at solidarity with the masses in order to reconstruct the destroyed Xiang-li society of the Han period. The role of these recluse-like people was therefore to become important in the formation of the aristocracy of the Wei 魏 and Chin 晉 periods.

The Sui-yuan 綏遠 Affair and New Developments in the Situation of the Anti-Japanese Movement in the North-western China

Teruo Terahiro

The Sui-yuan 綏遠 affair was an amateurish plot framed and carried out by a group led by a staff officer of the Kwan-tung Army 關東軍, who aimed to invade North-western China. This affair provoked the